

# 令和7年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の向上を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が多数寄せられました。程島宏美委員長、平松和夫副委員長、海浦洋子委員、原口瑞委員、萩谷英明委員、立花ますみ委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会で、最優秀賞2編、優秀賞7編、佳作31編が決定されました。この中から最優秀賞に選考された作品を掲載します。

## 最優秀賞

### 「食という生きる力」

県立中央農業高等学校 三年

米山 太一

「食べ物はね、人が生きる力であり安心して口にできるものでないとなんだ。研修先の農家さんに言われた言葉は、今も、これからも私の心に残るものになった。」

我が家は神奈川県西部小田原市の栢山という土地で、代々水稻の栽培を行っている。幼少期は、兼業で仕事をしながら情熱をもって米と向き合う祖父たちの姿を見て過ごした。しかし、私が小学校三年生のとき、両親が離婚、六年生のときに祖父が亡くなり、私は米と関わる事が一切無くなった。中学生になり、進路選択に悩んでいる私に、母は、亡くなった祖父の話をよくしてくれた。話を聞くうちに、今まであまり知らなかった祖父の家族への愛情や、米への想いを知り、少しずつ農業への関心が高まり、中央農業高校への進学を決めた。

入学後、将来は米農家になりたいと先生に伝えると、平塚市で起業し観光農業に取り組むガヤマファームの菊池さんを紹介していただいた。ガヤマファームでは、無農薬や減農薬での稲作を中心としており、「家族に食べさせたい特別なお米」というのをコンセプトにしており、安全なものも多くの人に届けたいという私の祖父と姿が重なり、改めて農業は重要な産業なのだ実感した。春先のまだ少し肌寒い頃から土を作り、初夏に田植えを終えると一面に生え渡る明黄色の早苗、酷暑の中で作業、また、それを避けるための早朝の作業時に見た鮮やかな日の出、さらに秋には風にたなびく黄金色の稲穂を目にし、一から育てたお米はそれまで食べてきたどのお米とも違う特別なものだった。「この感動と美味しさを、より多くの人に届けたい。」作業を重ねながら、その思いは日に日に膨らんでいった。この大変さや想いの集大成である農作物を、どのようにしたら分かってもらえるだろう。

私は、課題研究という授業で園児を対象とした食育活動をしてみてはどうかと考え、海老名市の保育園で働いている母に相談してみた。すると、「是非やってほしい！」と園に話を持ちかけてくれ、母の協力のもと、高校の土地を利用してサツマイモを栽培できることになった。今年の五月頃に園児約十名と植え付けを行い、都市化が進む海老名市の園児は、農業体験や食に對してどのような興味を持っているのか、食育を通してどのような変化が現れるのか、体験ごとにアンケートをとり、調査している。来る日も来る日も作業中に食べ物の大切さを伝えていくうちに、ある変化を耳にした。なんと、子どもたちが今まで嫌いだっただ野菜などを食べるようになったそうだ。これには保育園の先生や保護者が強い関心を寄せており、私自身も食育の必要性を実感した。

将来私は、食育体験型農園を設立し、それに加え、安全で美味しいと評判の米作りで生産者と消費者をつなぎ、地域とともに歩む栢山の米農家を目指そうと思う。じいちゃんや菊池さんが教えてくれた「食という生きる力」を、これからも伝えていく人になれるように。

## 最優秀賞

### 「助け合いの輪」を広げて

県立横浜平沼高等学校 二年

西村 真海

今年の四月に、和歌山県の紀伊大島を訪れました。紀伊大島の東端には、檜野埼灯台が立っています。この海域ではかつて、オスマン帝国(現トルコ)の軍艦が、台風の中で座礁するという悲劇的な事件がありました。

今から百年以上も前のことです。条約の締結などのために日本を訪れていたトルコの使節団は、エルトゥール号という軍艦で帰国の途に就いていました。そのときはちょうど台風季節で、運悪く船は座礁してしまっただけです。住民たちは音で何が起ったことに気づき、座礁した現場まで集まってきました。明かりで傷病者を照らし、初めて顔を見たとき、住民は驚きました。その人たちが日本人ではなかったからです。しかし、「海で遭難したものはかならず助ける」という強い鉄則が、檜野の漁師たちには染みついていました。

「どの国の人もいい。助けるんだ。」  
そのようにして、村人の懸命の救出は、昼夜を問わず、何日にも及びました。そのおかげで、住民の助けなしでは助からなかったであろう、多くの命が救われたのです。檜野埼には、今も慰霊碑が立っています。私は、碑を見つめながら、故郷から遠く離れて亡くなった方たちに思いを馳せました。

ある日、駅に向かおうと階段を降りる私の目の前で、ドイツ人の男性が、足を滑らせました。私は、その人が転ばないように懸命に支えました。男性はかろうじてバランスを取り戻し、立ち上がることができました。言葉は通じなくても、その男性が笑顔を向けてくれたとき、胸の中に、温かいものが満ちてきました。咄嗟のことでしたが、このささやかな出来事と、あの檜野埼での出来事が、ふいに重なって見えたのです。

「安全は、ずっと各自の努力、これに尽きると思っています。しかし、それは間違いでした。『安全』とは、一人でなく、みんなで助け合って社会全体として作っていくものなのです。誰かを助け、誰かに助けられる。この「共助」の連鎖で社会は安全に保たれています。そして、誰かの役に立てたとき、私たちは幸せを感じることもできます。それは、人が助け合って、悠久の、太古の昔から生きてきたからです。私たちは誰かを救うことで、巡り巡っては、自らの命も救ったからです。私たちは誰か、今はグローバル化が進み、日本に多くの海外の方が訪れています。災害の多い国ですから、今後、日本で被災する海外の方もいるでしょう。

また、超高齢社会の日本においては、より多くの高齢の方が、助けを必要とする状況になりつつあります。そんなとき、どうすればいいのでしょうか。私は、たとえ国籍が違おうと、自分とは何の関係のない人であっても、助けられる人になりたいと思います。なぜなら、他者を助けること、それは、自分を助けること。檜野の人々の姿がそう教えてくれたからです。